

巻 頭 言

旭川医科大学薬理学教授
安孫子 保



このたび、「日本臨床環境医学会」の機関誌が創刊されましたことを、会員の皆様とともに心からお慶び申し上げます。また、この学会の発足ならびにこの機関誌の創刊のために、心血を注ぐ努力をされてこられました北里大学医学部の石川 哲教授、宮田幹夫教授、旭川医科大学の保坂明郎教授、ならびに世話人の先生方に厚くお礼を申し上げます。

環境という言葉で思い出すのは、19世紀のフランスの生理学者クロード・ベルナールのいった内部環境 (milieu interieur) のことでもあります。内部環境というのは細胞を取り巻く環境、つまり細胞外液のことで、この内部環境があるおかげで細胞は外界からの影響を直接受けることなく、細胞機能の恒常性を保つことができます。人間を細胞にたとえれば、人間の住む環境 (environment) は細胞外液にあたるわけで、周囲の環境が変化するということは、細胞外液が変化することを意味することになり、これが人間の健康に与える影響がいかに大きいか分かります。ちなみに、英語の environment という言葉はフランス語で milieu ともいいます。

いうまでもなく、臨床環境医学は周囲の環境が原因となって生じた疾患の発生メカニズムを追及するのがその中心的なテーマですが、環境に原因のある疾患の発生を予防する方法や治療する方法を考え、これらの方法を現実の世界で実行することはさらに重要なテーマで

あります。したがって、臨床環境医学発展の成果は個人の健康の維持に益するばかりでなく、人類全体の健康維持に益するものであり、同時にわれわれの子孫の健康維持と幸福に役に立つものであります。文明が進んで生活がより近代化してきた今日、われわれの住む環境も大きく変化してきました。したがって、環境の変化によって生じた疾患も増えています。いまこそ、われわれ現代人が、自分自身の手で、われわれ自身とわれわれの子孫の健康維持のために臨床環境医学を発展させなければならない時であります。この意味で本学会の創立と本学会機関誌の創刊は、まさにタイムリーであり、しかも重要な出来事であります。

さて、本学会誌は創刊されたものの、どのようにして維持してゆくかが、これからの最大の課題であります。学会誌を定期的に刊行することは、学会誌としての当然の任務ですが、刊行を持続することは、創刊することに負けず劣らずの困難な作業がつきまといます。もし会員の皆様の協力と努力がなければ、これから先、本学会誌を編集、刊行し続けることはまったく不可能であります。

今ここに誕生した臨床環境医学の火を絶やすことなく、われわれ会員すべての人の努力と協力によって、これを全世界の臨床環境医学の発展というさらに大きな火とするために貢献することを、会員の皆様とともにここに誓うものであります。